

④ 福井県嶺南地域における課題解決型事業・プロジェクト

④ 福井県嶺南地域における課題解決型事業・プロジェクトについて

嶺南地域共創センターでは、福井大学の第4期中期計画を推進するため、ステークホルダーと協働し、学内公募により、嶺南地域の課題解決に取り組む事業・プロジェクトに対し支援を行っています。

<対象事業・プロジェクト>

嶺南2市4町（敦賀市、小浜市、美浜町、若狭町、おおい町、高浜町）・福井県等と連携し、嶺南地域の地域課題に取り組む事業・プロジェクト

<令和7年度実施分>

	事業名
1	R7年度 理科嶺南地域教材開発・活用プロジェクト
2	令和7年度嶺南地域をフィールドとした学校—地域連携教育プログラム開発合宿研修
3	フレイル予防と若さの絆プロジェクト
4	小浜みらいGO膳プロジェクト
5	美浜町におけるはあとぴあ内のこどもと高齢者のためのあそび場の設計に関する研究
6	福井こんぶDay プロジェクト ～福井の昆布文化を発信する～
7	嶺南地区における学校拠点を中心とした教育支援活動
8	嶺南地域中学校を中心とした探究学習推進プロジェクト
9	敦賀市民と福井大学留学生との交流事業 ～多文化共生の実現を目指して～
10	小浜市営住宅活用提案プロジェクト
11	福井梅の収量向上のための動画像・点群処理・骨格化を用いた樹構造解析と収量調査
12	嶺南地域における未活用食資源のリデザイン

【様式 2】

令和 7 年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	R7 年度 理科嶺南地域教材開発・活用プロジェクト		
代表者名	藤井 純子	代表者所属・役職	人文・社会系部門 教員養成領域・助手
配分額（円）	116,000 円		

(1) 期間
令和 7 年 4 月 29 日（火）
(2) プロジェクトの目的
嶺南地域の自然活用授業を開発するため、現地での実地研修を行う。この経験を 活かし、嶺南地域に強い（理科）教員養成に繋げる。
(3) プロジェクトの実施内容
地域資源教材開発・活用：「三方五湖周辺地学巡検」 日時：令和 7 年 4 月 29 日（火）8:00～17:00 頃 参加者：教育学部で理科の免許取得を希望し「基礎地学実験」または「地学演習」 を受講中の学部 2～3 年生 16 名，福井 CST 養成プログラム受講者（3 年 生）4 名，教員 2 名，合計 22 名 概要：三方五湖周辺を巡り，嶺南地域の特徴的な構造や地質を知り，福井県，特に 嶺南地域の地域素材を活用した授業づくりができるようにする。 日程：8:00 福井大学文京キャンパス 発 実習地 ・早瀬付近のアプライト質花崗岩と離水海食洞 ・レインボーライン，梅丈岳（各湖の特徴・三方五湖の遠望） ・塩坂越のチャート（付加帯の中古生層中の層状チャート）

- ・河中神社と恋の松原（旧河川と隆起後の変化）
- ・浦見運河（水月湖と久々子湖を繋ぐ運河の掘削，湖の水位の変化）
- ・美浜の耳川（堤防のない河川）
- ・福井県里山里海湖研究所

17:00 頃 福井大学文京キャンパス 解散

担当：教育学部 山本 博文・藤井 純子

（4）得られた成果

三方五湖は，嶺南地域における理科教育（自然教育）として非常に有用な教材である。しかし，教材として利用するための理解が必ずしも充分進んでいるとは言えない。今回のような現地見学会を含めた三方五湖の研修は，嶺南で活躍する教員には必須であると思われる。三方五湖の自然を教材として地元理解を進める上では，実際に現地に出向いて地形や地質，岩石等を観察，体感することは教育現場においても非常に役に立つと思われる。さらに地域の歴史とも繋がりがあるため，小学校や中学校どちらにおいても，理科や社会などの教科を跨ぐ教材としても活用できると期待できる。

今回の地学巡検に参加した学生の中には二度目の参加となる学生もいたが，一度目には理解しきれなかったことが，今回やっと腑に落ちた，こんなに面白い意味があったのかと熱心に取り組み，他の参加者と活発に意見交換する様子が見られた。同じ経験でも，繰り返すことによってこのように大きな意識の変化をもたらし，知的好奇心を刺激することにこちらも驚かされた。

これまで教員免許状更新講習等でも何度かこの三方五湖を題材に研修を行っており，少しずつではあるが，嶺南の自然の宝物という理解が進んでいると感じている。研修を受けた学生が，教員として学校現場で子供たちに三方五湖の自然を紹介することで，地元の宝物という理解がさらに進むことを期待している。

（5）今後の展開 ※今後、共同研究等への発展が見込める場合は、展望について詳細に記載ください。

三方五湖の成り立ちや重要性を理解している教員の数は，まだ充分とはとても言うことができず，この事業を継続することにより，三方五湖の成り立ちやその重要性を伝えていくことができる教員の数を増やしていかなければならないと考えている。教員養成学部で

【様式2】

ある当学科の担当する授業において、機会がある毎に取り上げ、学生に周知していきたい。

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	令和7年度嶺南地域をフィールドとした学校-地域連携教育プログラム開発合宿研修		
代表者名	浅原雅浩	代表者所属・役職	教員養成領域・教授
配分額（円）	450,000 円		

(1) 期間
2025年5月16日(金)ー18日(日) (2泊3日)
(2) プロジェクトの目的
R6, 7年度地域連携カリキュラム研究Ⅱの受講者合同による、地域の体験活動を主体とした、嶺南地域の実地調査研究に基づく小学校-地域連携カリキュラムの開発実習を行う。その結果、嶺南地域全域の小中高で展開されている「ふるさと学習」推進プロジェクト（探究的な学び）に資するプログラム開発と担当教員養成に寄与する。 更に、プログラム開発・運営には、連合教職開発研究科の院生2名も加わり、院生に対するOJTの場とする。
(3) プロジェクトの実施内容
5月16日(金) 12:30 福井大学発 14:00-15:15 敦賀南小学校 説明・インタビュー 15:30-17:10 原子力の科学館 あっとほうむ館内見学・実験・あっとシアター・質疑 17:35 伝平荘 着 18:30-19:30 夕食（各自で配膳） 19:30-21:30 グループワーク（途中、20:00-22:00 順番(男→女)に入浴） 23:00 消灯・就寝 5月17日(土)

【様式2】

7:30	朝食（各自で配膳）	
8:40	マイクロバスにて、中池見湿地へ移動	
9:00-10:05	中池見湿地（藤ヶ丘駐車場）（長靴着用、学芸員の講義・内覧・質疑応答）	
10:20-10:50	気比神宮（ここから徒歩移動、ガイド2名とともに2グループに分かれて）	
11:15-12:15	人道の港敦賀 ムゼウム	
12:15-13:30	移動・昼食・移動 ← 各自 or グループで昼食会場を選択	
13:30-14:20	敦賀みなと山車会館 ← 集合時間厳守	
14:30-15:20	敦賀市立博物館	
15:20	プラン① 徒歩で 本勝寺 → 永賞寺へ	プラン② バスで 疋田舟川 へ
15:45	永賞寺 着	疋田舟川 着
	16:40 バス待ち	16:30 バス移動開始
16:50	永賞寺 発	
17:30	（敦賀駅 経由） 伝平荘 着	
18:00	夕食（各自で配膳）	
19:00-22:30	地域素材を活用した学習プログラム作成（途中、入浴&中間チェック）	
23:00	消灯・就寝	

5月18日(日)

7:00	起床&荷物の整理	
7:30	朝食（各自で配膳）荷物を持って集合	
8:20-10:50	資料作成	
11:00-12:10	プレゼンテーション（発表7分・質疑3分）←地域のステークホルダー対象	
12:15-13:00	昼食	13:15 伝平荘 発
		14:45 頃 福井大学 着



2年生事前調査の発表(5/14)



敦賀南小学校(5/16)



あつとうほうむ(5/16)



中池見湿地(5/17)



気比神宮(5/17)



敦賀みなと山車会館(5/17)



ムゼウム(5/17)



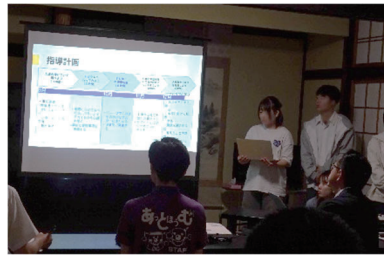
本勝寺(5/17)



疋田舟川(5/17)



プログラム作成中(5/17 夜)



成果発表(5/18 午前)



ステークホルダーの助言(5/19)

(4) 得られた成果

学生は、4つにグループに分かれて、地域連携教育プログラムの開発を行った。成果物の抜粋は以下の通りである。

中池見湿地〇〇になろう！

初等教育コース 3系
2年 ○○○○
3年 ○○○○、○○○○、○○○○

概要

第4学年 (13時間)	第5学年 (10時間)	第6学年 (6時間～)
〇中池見湿地マスターになろう！ ・中池見湿地の調査をし、春夏秋冬の生態系を記録する。	〇福井の湿地博士になろう！ ・県内の小学校と交流し、取り組みをまねる。	〇中池見湿地のヒーローになろう！ ・中池見湿地の特徴を生かした環境保全を促進する活動を考える(できれば実施)

山車の文化を伝える

○○○○、○○○○、○○○○、○○○○

単元の詳細
対象：敦賀南小学校4年生 単級クラス(35人想定)
教科：総合、社会、国工、家庭科、情報
【実施期間】
4年生の9月～5年生の7月

実施月	活動
4年生 9月	山車の存在を知る
10月	山車の伝統を受け継ぐことの意味を考える
11月	私たちにできることは何かを考える
12月～3月	敦賀の山車を知る 知名度調査 オリジナル山車作成の計画を立てる
5年生 4月～6月	オリジナル山車作成開始
7月	オリジナル山車をひく

命のつながりについて考えよう

チームB
2年:○○○○ 3年:○○○○ ○○○○ ○○○○

指導計画

人通の港について調べよう(3時間)	ムゼウムへ行ってみよう(3時間)	まとめ・中間発表会(6時間)	住職に講話を聞いて暮らすの時間について考えよう(3時間)	人権集会で学びを共有しよう(6時間)
9月	10月	11月	12月	
・事前調査 〇数箇所で人通の港についてインターネット等で情報を集める	・実際にムゼウムへ行き、ボランティアガイドからお話を聞く 〇事前に質問事項を準備する	・グループでこれまでの学びをポスターにまとめる ・児童間で発表する	・本勝寺住職に講話をお聞きする ・お話をもとに自分の命について考える	・これまでの学びをスライドにまとめる ・全校に向けて発表する ・発表を聞きながら考えたことや気づきなどについて振り返り活動を行う

水田循環のヒミツを大発見！ ～水田循環と生態系のつながり～

チームD
2年 ○○○○、○○○○
3年 ○○○○、○○○○

3. 単元計画 (全24時間)

春 → 夏 → 秋 → 冬

- 事前学習：中池見湿地の季節の田んぼの特徴調査 … 1コマ
- 現地活動：中池見湿地の田んぼの季節の動植物調査 … 2コマ
- 事後学習：前季節との比較 … 1コマ

①+②+③+④まとめ
・動画制作
・発表会(準備も含む)
…計12コマ

2025/5/17 → 中学校での継続的な学びへ

(5) 今後の展開 ※支援対象プロジェクトの区分が(1)または(2)の場合は、共同研究等への展望について詳細に記載ください。

これまで、本センターの支援を受け、令和5年度はおおい町、令和6年度は若狭町、そして、令和7年度(本年度)は敦賀市をフィールドとして、地域資源を活用した地域連携教育プログラムを学生とともに進め、地域の学校教育や学校を支援する組織の関係者に対して本事業で作成したプログラムを公表してきた。特に、今年度は、参加頂いた小学校長からのご支援もあり、プログラム「山車の文化を伝える」に関しては、3回の特別プログラムとして再構成し、本年度の夏季

山車ってなにー？

山車を知らない人に魅力を伝えよう！

企画：敦賀南小学校

第1回 7月27日(日) 9時～12時
山車ってなにー？
山車ってなにー？
山車ってなにー？

第2回 8月3日(日) 10時30分～15時
山車を調べよう！
山車を調べよう！
山車を調べよう！

第3回 8月12日(水) 9時～12時
山車のことを発表しよう！
山車のことを発表しよう！
山車のことを発表しよう！

・計画立案・実施・評価・振り返り(4～5年)まで、(第2回の発表まで)
・材料費等の負担は敦賀市が負担しますが、発表料は各校が負担します。(第2回の発表料は各校が負担します。)
・発表料は各校が負担しますが、発表料は各校が負担します。(第2回の発表料は各校が負担します。)
・発表料は各校が負担しますが、発表料は各校が負担します。(第2回の発表料は各校が負担します。)

応募：各校の先生、保護者、関係者など
応募：各校の先生、保護者、関係者など
応募：各校の先生、保護者、関係者など

【様式2】

休暇中を中心に、有志の学生と当該校長のコラボによる地域連携イベントが実施された。

令和8年度は、小浜市をフィールドとしたプログラム開発を計画している。次年度以降も、このプロジェクトから始まる嶺南地域の子どもたちが、もっと深く嶺南地域を知る活動に繋がっていきたい。

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	フレイル予防と若さの絆プロジェクト		
代表者名	山村修	代表者所属・役職	医学部 地域医療推進講座
配分額（円）	447,000 円		

（1）期間

2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日

（2）プロジェクトの目的

今年度からは、従来の検診事業を継続するとともに、若狭町全域を対象にフレイル・サルコペニア予防の重要性について分かりやすい情報発信を行う。また、特定健診において行政主導で握力測定を実施し、若年層を含む住民の理解を促進する。これにより、地域全体でのフレイル・サルコペニア予防に加え、今後増加が予想される認知症予防への意識向上と体制強化を目指す。

- ① 地域全体へのフレイル・サルコペニア・認知症予防に関わる講演会の実施
- ② 特定健診における握力測定の解析
- ③ 地域全体を対象とした福大検診の実施

（3）プロジェクトの実施内容

① フレイル・サルコペニア・認知症予防に関わる講演会の実施

フレイル・サルコペニア・認知症予防に関する理解促進を目的として、住民を対象とした講演会を実施した（図1）。講演では、加齢に伴う身体機能低下の特徴や予防の重要性、日常生活で実践可能な運動・栄養・社会参加について解説した。



図1．講演会

参加者が180名と好評であった。

② 特定健診における握力測定の解析

課が、若年層の無関心層（フレイル・サルコペニア）に対し筋力低下を実感する機会を提供することを目的として、特定健診における握力測定を実施した。得られたデータについては本講座が解析を行い、エビデンスに基づく政策立案に活用するための資料作成を進めている。

③ 地域全体を対象とした福大検診

福大検診は2025年6月および12月に実施した。両回ともに医学生、看護学生をはじめ、医師、臨床検査技師、診療放射線技師、理学療法士、作業療法士、看護師、保健師、管理栄養士が参加し、地域をフィールドとした多職種連携教育（IPE）を実践するなど、実践的な学習機会を提供することができた。（図1.）。

図2. 地域をフィールドとした多職種連携教育（IPE）の実践現場



(4) 得られた成果

① 講演会の実施

講演会の実施により、参加者の健康づくりに対する意識向上の機会を提供することができた。また、その効果として本講座が実施する福大検診の参加者増加にもつながった。

② 特定健診における握力

握力基準:AWGS2025 採用（65歳以上：男性＜28kg、女性＜18kg、50～64歳：男性＜34kg、女性＜20kg、*49歳以下は50～64歳の基準値を採用）解析結果：サルコペニア疑い（各年齢層n数を基準とした%）49歳以下（男性:0%, 女性:約7%）、50～64歳（男性:約5%, 女性:約5%）、65歳以上（男性:約4%, 女性:約7%）この結果か

ら、男性では49歳以下と比較して50代以降で握力低下がみられる傾向があり、女性では65歳以降で握力低下が顕著となる傾向が示唆された。さらに解析を進め、エビデンスに基づく知見の蓄積に努め、その成果を行政へ提供する。

③ 福大検診結果

サルコペニア判定：AWGS2019（プレサルコペニアは筋肉量低下のみ、ダイナペニアは筋肉量が正常で筋力または身体機能の低下、サルコペニアは筋肉量低下に加えて筋力または身体機能の低下を認める状態と定義される。）

- ・2025年6月：219名プレサルコペニア約8%，ダイナペニア約2%，サルコペニア約1%
- ・2025年12月：195名プレサルコペニア約11%，ダイナペニア約2%，サルコペニア約3%

- ・神経心理検査用プログラム（ミレボ）ミレボ得点45点以下：認知機能低下約2割

検診の実施により、地域住民におけるサルコペニアおよび認知機能低下の実態を把握する成果を得た。これらの結果は、今後のフレイルなどの予防や健康支援の検討に資する基礎資料となることが期待される。

当初計画から予算の変更が生じたものの、検診および多職種連携教育（IPE）を十分に実践することができた。地域をフィールドとして、多職種が現場での連携を学ぶ実践的な教育機会を創出するとともに、地域住民に対してフレイル・サルコペニア予防の重要性を知る機会を提供することができた。これらを通じて、教育的および地域貢献の両面において有意義な成果が得られた。

（5）今後の展開 ※今後、共同研究等への発展が見込める場合は、展望について詳細に記載ください。

今後は、特定健診における握力データの蓄積を進め、さらなる解析を行うことで、若年層を含めた住民がフレイルやサルコペニアを早期に認識する機会となる資料の作成を行い、行政施策の検討に資する情報提供に努める。また、地域住民の認知機能に関するデータを解析し、認知症予防に向けた基礎資料として行政への政策提言につなげていく。さらに、本事業で得られた結果を地域の医師や医療関係者へ共有する講演会を開催し、地域全体での予防医学の推進と健康寿命延伸に寄与することを目指す。

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	小浜みらい G0 膳プロジェクト		
代表者名	大西秀典	代表者所属・役職	医学部 地域医療推進講座
配分額（円）	446,000 円		

(1) 期間

令和7年4月1日～3月31日

(2) プロジェクトの目的

プロジェクトの目的は、個別調理システムを導入することで、食事療法を必要とする患者および独居高齢者への適切な食事提供体制を構築し、地域全体の健康水準の向上を図ることである。

令和7年度の目的

- ② 個別加熱調理システムの導入による栄養状態とサルコペニアの状況を把握
- ② i-DISH 株式会社を中心に他施設への個別調理システムの導入の試み

(3) プロジェクトの実施内容

① 栄養評価の検診を2025年4月、2026年2月実施

検診の実施は、2025年4月、2026年2月に検診ができた。2026年2月の検診では医師2名、事務スタッフ2名、臨床検査技師4名、理学療法士4名、作業療法士1名、医学生5名の参加があり、社会福祉施設をフィールドに多職種連携教育（IPE）が実践できた（図1.）。

図1. 社会福祉施設をフィールドとした多職種連携教育（IPE）の実践現場



②個別調理システムの導入の拡大への試み

i-DISH 株式会社が事業拡大に向けて関係機関との調整および協議を行った。具体的には、小浜市内の医療機関、給食施設、福祉関係機関等と連携体制の構築に向けた打合せを実施し、個別調理システムの活用方法について意見交換を行うとともに、導入に向けた調整を進められた。

(4) 得られた成果

<検診結果>

成果として、検診を実施し参加者の健康状態を確認するとともに、結果を参加者へ還元する機会を提供することができた。2024年度と2025年度を比較した結果、個別調理システムの利用により栄養状態の改善を反映して血清アルブミン値の上昇

(4.2 ± 0.3 vs 4.4 ± 0.3) が認められた。一方、血清亜鉛値の低下 (86.8 ± 12.9 vs 71.8 ± 11.8) は、体内利用の増加や吸収不良による可能性が考えられる。また、HbA1c は低下 (5.6 ± 0.4 vs 5.3 ± 0.4) し代謝状態の改善が示唆された。しかし、立ち上がり、握力、片足立ち時間および筋肉量には変化は認められず維持されていたものの、身体機能の向上のためには今後、運動療法の併用が必要である可能性を示す知見を得た。

<多職種連携教育（IPE）の実践>

社会福祉施設をフィールドとした多職種連携教育（IPE）を実践することができ、実践的な学習機会として大変有意義な成果が得られた。

<個別調理システムの導入の拡大への試み>

i-DISH 株式会社が個別調理システムの導入に向けて関係機関との調整および交渉を進めており、現在も導入に向けた協議が継続している状況である。これにより、関係機関との連携体制構築に向けた基盤が形成された。

<学会・講演による報告>

1) 山村修. 新潟大学歯学部×福井大学医学部、フレイル研究から考える予防戦略. 日本補綴歯科学会関越支部学術大会・総会. 令和7年11月30日（高崎市）

2) 山村修. 我が国の高齢者の現状 サルコペニア、フレイルに関する知見を活用した地域での事業展開. JICA 福井県事業フォローアップセミナー. 令和8年3月7日 (Thailand)

当初計画から予算の変更が生じたものの、検診および社会福祉施設をフィールドとした、多職種連携教育（IPE）を十分に実践することができた。医療・介護・福祉分野の多職種が現場を基盤として連携を学ぶ実践的な教育機会を創出するとともに、医学生と医療スタッフが意見交換や学習を行う時間を十分に確保することができた。また、社会福祉施設においては、利用者一人ひとりの障害の程度や状態に応じた対応を

【様式2】

実際の現場で学ぶ機会となり、個別性に配慮した支援のあり方を理解するうえでも貴重な実践経験となった。これらの取り組みにより、教育的観点からも大変有意義な成果を得ることができた。

(5) 今後の展開 ※今後、共同研究等への発展が見込める場合は、展望について詳細に記載ください。

次年度は、これまでに導入した個別調理システムの効果について再評価を行う。2024年8月には本事業に関連する研究成果を *Journal of Nutritional Science and Vitaminology* 70(4) 352-358 にて論文公開しており、本活動が「食」を活かした先進的な取り組みおよび研究として実績を有していることから、「食」を活かしたまちづくりを推進する杉田玄白賞への応募を行う。これにより、本事業の社会的価値を広く発信するとともに、外部からの評価を得ることで社会的インパクトを高め、活動の普及・発展につなげていく。さらに、i-DISH 株式会社による個別調理システム導入の拡大により拠点整備が進めば、栄養士が所属していない施設においても食事療法を継続的に提供できる体制の構築が期待される。これにより、患者のみならず独居高齢者への食事提供にも活用し、地域住民の栄養バランスの改善、健康寿命の延伸および再入院患者の減少を目標とした取り組みを継続的に推進していく。

【様式 2】

令和 7 年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	美浜町におけるはあとぴあ内のこどもと高齢者のためのあそび場の設計に関する研究		
代表者名	西本雅人	代表者所属・役職	建築・都市環境工学科・准教授
配分額（円）	440,000 円		

(1) 期間
2025 年 6 月 1 日～2026 年 12 月 28 日
(2) プロジェクトの目的
本プロジェクトの目的は美浜町における全天候型あそび場施設の実施設案を作成するために行うことである。美浜町では子育て世代のあそび場に対するニーズに応えるため町内にこどものあそび場を整備することを検討している。今回の遊び場の整備において、高齢者も利用する「はあとぴあ」という福祉施設内のホールに遊び場を整備することから高齢者側の利用を阻害にしないことが必要であった。そのため、関係課との協議、整備範囲の確定、実施設計、こども、高齢者の意見の抽出を行った。
(3) プロジェクトの実施内容
(別紙参照) 今年度の活動をまとめて、美浜町に提出した報告書を添付いたします。

(4) 得られた成果
①こどもワークショップから得られた成果 こどもたちは可動遊具がある施設で育った経験があり、本遊具整備でもこどもたちが動かすことができる大型の積み木があると遊びが発展しやすいこと。 可動である分、崩れる危険性があるので高齢者にぶつからない南側のエリアに配置した方が良いこと。 どのワークでも囲んだ場所で遊びが発生していた。そのため、本遊具でも囲われた箇所は遊びを誘発するために必要であると考えているが、同時に視認性の確保も重要である。特にはあとぴあの受付カウンターからの視認性が確保できるように、囲ったとしても部分的に開口部をとることを検討し、模型などで職員と確認を行うこと。 ②高齢者ワークショップから得られた成果 高齢者からは安全性の意見がよく出された。こどもの飛び降りの対策も行う必要がある。下にウレタンマットを敷き、飛び降りをしない注意喚起もサイン計画などで行う。また、上部に手がかりとなるものを無くして、上がりにくくすることも検討する。そして、上に登れる段数を何段までとするかは職員とも十分に話し合い検討する。 ③その他の成果 整備範囲の確定できた。はあとぴあ内で整備するにあたって健康診断を阻害しないことが条件であった。今回、健康診断のされ方を把握して、阻害しないことを協議して、整備範囲を決定した。 実施設計の設計書を提出した。設計案をもとに工事費用の概算を行った。 全国への遊び場へのアンケート調査は集計を完了し、協力していただいた施設に向けて報告書を作成した。今後、そのデータを分析して、遊び場の規模による必要設備の検討を行う。
(5) 今後の展開 ※支援対象プロジェクトの区分が(1)または(2)の場合は、共同研究等への展望について詳細に記載ください。
A：あそび場整備の予算の確保 美浜町の2026年度の予算として、3,000万円ほどのあそび場整備のための予算を申請した。1月5日、15日に町長へ担当課が説明を行った。前向きな意見が出された一方で、全ての木材を美浜町産材にしたいとの要望も出された。もし、予算の内示が出た場合は、材料の調達や実施設計の修正を行う予定である。 B：美浜町との共同研究等の展望 今年度、美浜町と共同研究を締結することができた。これは遊び場整備のための実施設計のための共同研究であり、今後の使われ方、メンテナンスについても協議していき、さらなる共同研究を獲得することを目指す。

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名 称	福井こんぶ Day プロジェクト ～福井の昆布文化を発信する～		
代表者名	江端 弘樹	代表者所属・役職	高等教育推進センター・特命講師 (現:周南公立大学総合教育部・教授)
配分額(円)	400,000		

(1) 期 間
令和7年4月1日～令和8年2月28日
(2) プロジェクトの目的
福井県は、全国屈指の昆布消費地(嶺北)であると同時に、世界的な昆布加工技術の拠点(嶺南)を擁する稀有な海藻食文化が定着した地域である。特に、ユネスコ無形文化遺産「和食」を支える象徴的存在であり、職人の手削り技術に依存する「おぼろ昆布」の独占的な生産基盤を有するなど、本県に深く根ざした昆布加工品は世界的な価値を有している。 しかし、その存在があまりに日常に溶け込んでいるがゆえに、若年層を中心に昆布の生物学的特性や伝統技術の希少性に対する認識が希薄化し、文化の維持・発展が危ぶまれる「知の欠落」が喫緊の課題として浮き彫りとなった。これを受け、本プロジェクトはこの衰退の流れに歯止めをかけ、単なる消費拡大の枠組みを超えた文化継承を目指して始動した。藻類学の「専門知」を地域社会の「食・文化・エンターテインメント」の文脈へと再定義し、県民の認識を単なる食材から「郷土が誇るべき生物・文化資産」へと転換させることを目的としている。4年間の活動を通じ、県内外の多様なステークホルダーと連携しながら、子供から大人まで全世代をターゲットに、科学的エビデンスに基づきつつ五感に訴える独自のアウトリーチ手法を確立。福井の昆布文化を次世代、ひいては世界へと継承するための強固な基盤を構築することを目指した。

(3) プロジェクトの実施内容

本年度はプロジェクトの総括年度として、過去3年間の蓄積を結実させ、以下の通り学内外および国際舞台において重層的な活動を展開した。

1. 次世代を担う学生主体組織の設置と育成

- 本プロジェクトの最大の特徴として、工学部等、非生物系学部の学生による福井大学公認団体 福井こんぶ応援サークル「臚・OBORO」(以下、OBORO)を設立した。
- 代表者の指導のもと、学生自らが企画・運営に携わる体制を構築したことで、一過性のイベントに留まらない、学生による自律的なアウトリーチ活動を軌道に乗せることに成功した。



図. OBORO 主要メンバー



図. OBORO が核となって開催された「福井こんぶ Day in 丸岡」の当日スタッフ

2. 在職中の重点活動:国際舞台と地域教育の融合

- **戦略的メディアアウトリーチの展開:**4 月には OBORO 部長の伊藤大吾君が FBC テレビ「おじゃまっテレ ワイド&ニュース」に生出演し、学生視点での昆布文化の魅力を発信した。11 月には代表者の江端が福井テレビ「なんだー?ワンダー!」に出演し、専門的知見をエンターテインメントの文脈で解説した。加えて、地元紙をはじめとする新聞各紙の積極的な活用により、活動の社会的認知度を飛躍的に高めた。



図. 番組出演の様子「おじゃまっテレ ワイド&ニュース」



図. 番組放送の様子「なんだー？ワンダー！」

- 大阪・関西万博での講演・出展(7月21日・27日): OBOROとともに「BLUE OCEAN DOME」パビリオンにて5m超の生コンブを用いた展示・講演を実施し、福井の特徴ある食文化・加工文化を発信した。国内外の来場者に「身体感覚を伴う藻類学」を提示し、主要メディアでも大きく報じられた。



図. 大阪・関西万博での様子 (白丸:OBORO 部長)

- 大学祭「暁祭」連動講演会(5月25日): 本プロジェクトがOBOROとともに実施。生コンブを用いた実演やクイズ、昆布文化の紹介を通じて若年層への直接

的な啓発を深化させた。

- 学内公開講座と「おぼろ昆布けずり体験会」(6月26日): OBORO とともに実施。参加者の1/3を留学生が占め、参加者らによる多言語での SNS 発信を通じて、福井の文化が国際的な資産として語り継がれる契機を創出した。



図. 公開講座チラシ、おぼろ昆布削り体験会チラシ

3. 退職後の協力継続によるプロジェクトの完遂

- 代表者の江端は 2025 年 11 月末に福井大学を退職したが、地域への責任と本事業の集大成を完遂すべく、以下について退職後も無償での継続協力を実施した。実施組織の枠を超えた協力体制により、当初の計画を大きく上回る成果を得るに至った。
- 12 月以降のマスコミ対応: 11 月のテレビ放送後の広範な反響への対応や、追加取材等の広報活動を完遂した。
- 日本藻類学会第 50 回大会(2026 年 3 月 21 日)対応: OBORO の学生(伊藤大悟・田中琉聖ほか)らとの連名で「地域昆布文化を活かした藻類学アウトリーチ: 学生主体の『福井こんぶ Day』4 年間の成果」と題した総括発表を行った。発表において本プロジェクト予算への謝意を示した。

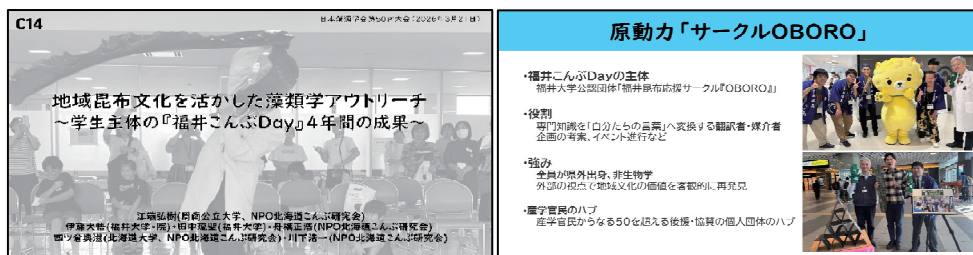


図. 日本藻類学会口頭発表スライド(抜粋)

(4) 得られた成果

1. 学生組織「OBORO」の設立と学内活動の定着

- 非生物系学部の学生による OBORO を設立し、学内の公式な地域貢献活動として定着させた。学生自らが企画・運営の主体となる組織体制を構築したことで、持続的なアウトリーチ活動を軌道に乗せ、福井大学のプレゼンス向上に大きく寄与した。

2. 圧倒的なメディア露出と社会波及実績

- 福井県 内で大規模イベントを開催していない本年度においても全国紙を含めた報道は 7 回を数えた。これにより、大学の高度な教育・研究活動が「地域に根ざした先進的な取り組み」として広く社会に浸透した。「福井こんぶ Day」関連、OBORO および関連する個人への取材・報道は 4 年間で累計 39 件に及び、学術活動の社会実装モデルとして極めて高い波及実践を残した。



図. 新聞報道事例

3. 「文化の翻訳者」としての次世代教育モデルの確立

- 学生が専門家と一般市民の間に立ち、難解な専門知を市民の日常生活に即した言葉で噛み砕いて伝える「文化の翻訳者」としての育成モデルを確立し、その有効性を実証した。
- 実演やメディア出演等の実践を通じ、高度なコミュニケーション能力と社会実装への意識を習得させた。

4. 日本藻類学会第 50 回大会における成果とモデルの評価

- 2026 年 3 月 21 日の学会にて、4 年間の全活動を体系化した総括発表を行った。
- 特に、福井県嶺南地域の課題解決のために構築した社会実装モデルを提示し、他学研究者から「専門知を地域文化と融合させた先駆的なモデル」として高い評価を得た。

5. 「情報の出しっぱなし」からの脱却とメディアミックスの実現

- 代表者のナホトカ号事故調査(1997 年)以来、30 年近くにおよぶ福井県へのコミットメントを基盤に、テレビ・ラジオ・新聞各社と連携した戦略を展開した。
- 市民に深く届く双方向的なコミュニケーションを実現し、地域住民が自らの文化を科学的視点で再発見する「知の共有」を達成した。

(5) 今後の展開

1. 福井大学の「キラーコンテンツ」としての定着

- 本プロジェクトで構築した「福井の昆布文化×藻類学」のアウトリーチ手法、およびこれを支える OBORO の活動は、他大学にはない福井大学が誇るべき独自の強みである。本事業を一過性のものとせず、今後は年間 2 回程度の「特別公開講座」などの形で定着させ、全学横断的な地域貢献事業として継続・発展させることを強く提言する。

2. 科学で地域文化を支える拠点の形成

- 活動を持続させるために、福井県内のマスメディアに向けて定期的に情報発信を行ってきた。その結果、嶺南の文化に関する理解者を、県内マスメディア内に一定数生み出すことに成功している。
- 特長的な食文化や職人技術をはじめとする加工文化の継承という深刻な課題に対し、本学が培った本事業の「エンタメ系アウトリーチ」と「翻訳者モデル」は極めて有効な処方箋となり得る。整備された資産と学生たちの熱量を活用し続けることで、福井大学が「地域文化を科学的視点守り育てる拠点」としての地位を揺るぎないものにできると確信している。

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	嶺南地区における学校拠点を中心とした教育支援活動		
代表者名	中森 一郎	代表者所属・役職	総合教職開発本部
配分額（円）	398,650 円		

(1) 期間
令和7年4月2日から令和8年2月27日まで
(2) プロジェクトの目的
嶺南教育事務所や嶺南地区の連携校等と連携し、嶺南地区における協働研究など教育活動の推進及び課題解決学習や探究学習の先進的取組としての発信を進め、児童生徒だけでなく嶺南地区の活性化に資することを目的とする。
(3) プロジェクトの実施内容
嶺南地域の各学校や嶺南教育事務所と連合教職開発研究科が連携協働し、嶺南地区の学校拠点での実践研究（学校現場での長期インターンシップ・実習）及び学校での課題研究の支援を実施することにより、地域の教育力向上に取り組んだ。嶺南地域の連携校には現職教員が院生として在籍（令和6年度：6校・9名）しており、院生と連合教職開発研究科教員及びコーディネーターリサーチャーが中心となって各学校での実践研究や課題研究を推進した。 敦賀ラウンドテーブルでは「協働探究ラウンドテーブル敦賀 2025 直観的判断力が切り開く世界とは？」というテーマで敦賀高校、美方高校の生徒、教員を中心に県外の高校生も参加して日本航空株式会社機長 片桐 潔志 氏によるの講演をもとに、直観的判断力についてグループ対話を行なった。

【様式2】

さらに、その成果を嶺南教育事務所や嶺南地区各市町教育委員会と連携し学校を超えての展開を図り、さらに連合教職開発研究科が開催する実践研究福井ラウンドテーブルにおいて全国に発信した。

・p4cにおける児童生徒の対話をICレコーダーで記録し、記録をもとに振り返ることを通して、子どもたちの思考の深まりやそれを引き出す問いのあり方等について教員の授業研究に役立てることができた。

(4) 得られた成果

・学生が嶺南地区の教育現場と関わることで、嶺南地区の魅力を知り、教員志望者の少ない嶺南地域の教員志望者の増加に繋がる支援ができた。

・探究的なふるさと学習を進め出している嶺南地区の教育の理解と支援を進め、先進地区として発信した。

・嶺南地区で行われている実践研究や課題研究を推進し、また学校及び教職員間の交流を促進することで、嶺南地区の教育力の向上に寄与した。

・地域に根差した課題研究は、課題研究そのものに加え、中高生が大人になったときに課題研究等を通して接した地域に根付くことに繋がるよう支援した。

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	嶺南地域中学校を中心とした探究学習推進プロジェクト		
代表者名	清川 亨	代表者所属・役職	連合教職開発研究科
配分額（円）	306,845 円		

（1）期間
令和7年4月16日（水）～令和8年2月27日（金）
（2）プロジェクトの目的
これから嶺南地域を支えていく児童生徒が探究による課題解決の経験値を増やしていくことが重要である。しかし、未だ学校では、課題解決学習といいながら、調べ学習にとどまっている学校が多い現状にある。 そこで、本プロジェクトでは、中学校を中心に学校における探究学習の支援を行い、嶺南の子どもたちの嶺南地区の課題解決に向けた資質・能力の向上を目指すことを目的とした。
（3）プロジェクトの実施内容
1. カンファレンスや研修会 探究学習の支援に当たる教員自身の探究への理解と教員自身の探究の経験を積む場として、下記のカンファレンス等を行った。 ①探究学習カンファレンス：5月7日（水）、オンライン、小中高から12名が参加。参加校としては、栗野中学校、小浜第二中学校、高浜中学校、中郷小学校、栗野小学校、梅の里小学校、西津小学校、敦賀高校、嶺南教育事務所の8校1所。 探究学習とは何か、その基本の確認と探究学習の現状の情報共有などを行った。

②探究学習研修会：2月9日（月）、パレア若狭、小中高・町教委から30名が参加。参加校としては、若狭町の各小中学校、おおい町の小中学校、若狭高校、嶺南教育事務所、おおい町教育委員会事務局など15校、2所

独立行政法人教職員支援機構のフェローでもある崇城大学准教授の溝上広樹氏を講師に迎え、探究における問いを鍛える活動を通して探究学習への理解を深めた。

③探究学習先進校視察：2月3日（火）、愛知県東浦町立東浦小学校、嶺南の小学校5校（大島、栗野、中郷、梅の里、西津）から各1名が参加

嶺南地区の探究の向上につながるよう、児童が主語になる学習活動の先進校の実際を視察し、その状況を5名の勤務校や嶺南地区で共有を図った。

2. 学校支援

上記1. ①の参加校を中心に嶺南地区の学校を訪問し、教員や生徒の取組みに対して様々な視点や知見の提供、改善点の指摘など、探究学習の支援を行った。なお（）内は訪問月日

①上中中学校

金曜日に行われる生徒の探究（My 探究、9/26、11/21）、My 探究中間発表会（12/12）、My 探究発表会（2/27）において、生徒や教員への支援を実施

②栗野中学校

担当教員の支援（5/1）、生徒への講演（1・2年450名、5/12）や探究学習支援（11/19）を実施

③小浜第二中学校

探究学習状況確認や3年生探究学習最終発表会に参加し、教員に対して今後に向けたアドバイスを実施（11/28、12/29）

④高浜中学校

探究学習の状況を確認し生徒や担当教員に対して支援を実施（10/28）

⑤大島小学校

昨年度末に作成した探究学習におけるルーブリックの具体的活用について校長や探究担当教員を支援（10/28）

また、坂井市雄島との探究学習交流会を提案し、2回行われた（11/28、2/26）。

⑥栗野小学校

探究学習の状況を確認し（11/10）、教員研修会を実施（1/28）

⑦中郷小学校

探究学習の状況を確認し、教員との意見交換を実施（10/29）

⑧西津小学校

探究学習の状況を踏まえ、教員および児童に対して支援を実施（11/28）

⑨梅の里小学校

担当教員と探究学習に係る意見交換を実施（12/9）

⑩若狭高校

1年生の探究学習のテーマ決めに参加し支援を実施（11/25）

⑪敦賀高校

担当教員との探究学習に係る意見交換を実施（7/1） 3. 教育委員会との情報共有 学校の探究学習の状況を理解、支援するように教育委員会等を訪問し、教育長や探究学習担当者との情報交換を行った。訪問した教育委員会等は次の通り。（）内は訪問月日 ①敦賀市教育委員会（6/2、7/1、11/19、1/8） ②小浜市教育委員会（1/9） ③おおい町教育委員会（1/9） ④若狭町教育委員会（1/9） ⑤嶺南教育事務所（4/16、5/7、12/22） なお、清川は、次年度、他県との探究学習交流を考えている市町、あるいは学校に対して情報共有を進めたい、また視察で得た知見の共有も図りたいと考え、生徒が主体的に探究に取り組む県外中学校の中から、今回は小規模ながら地域課題の解決に取り組んでいる沖縄県久松中学校を選定し現地視察を行った。
（4）得られた成果
教師自身の探究への理解が進み、調べ学習ではなく課題解決に向けた児童生徒の探究学習への指導力が高まり、教師と相似形である児童生徒の課題解決への資質能力の向上が見られた。また探究学習を進める過程で児童生徒の当事者意識が高まり、自己肯定感が増したり、主体的な態度が育成されたりするなどの状況が確認された。 嶺南地区の探究学習の情報共有がわずかながらでも進み探究学習の小中高の連続性を教員が意識するようになったことで、小中間、中高間での連携を意識したいと発言する教員が出始めた。また、大島小学校と坂井市雄島小学校との探究学習交流会では、児童と教員のメタ認知が進んだ。
（5）今後の展開 ※支援対象プロジェクトの区分が（1）または（2）の場合は、共同研究等への展望について詳細に記載ください。
上中中学校は県外からも探究学習の視察に訪れるようになり、同校は探究学習のある程度の自走を始めたことから、今年度支援を行った学校から次年度は小浜第二中学校の自走に向けた支援をすることで、探究学習の拠点校となる中学校を嶺南地区に複数作りたいと考えている。また、児童生徒がどの学校種でも同じようなテーマで探究を重ねるのではなく、成長過程でつながりと深まりのある探究学習の経験を積むことができるよう小中高の連携を模索してみたい。更に、県外中学校と嶺南地区中学校の探究学習の交流により嶺南地区をメタ認知する機会の創出の可能性を探りたい。 並行して、児童生徒の探究学習を支援する教員の実践に向けた省察の場となる教員のネットワーク作りを進め、嶺南地区の学校の探究学習を支援し、将来の嶺南地区の課題解決を実践者の育成に寄与したいと考えている。

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	敦賀市民と福井大学留学生との交流事業 ～多文化共生の実現を目指して～		
代表者名	小幡浩司	代表者所属・役職	国際地域学部 教授
配分額（円）	322,000 円		

(1) 期間	
令和7年4月～令和8年3月	
(2) プロジェクトの目的	
今回のプロジェクトの目的は、異文化交流が市民の文化的多様性に対する意識改革を促進し、相互理解を深め、誰もが共生できる地域社会を構築することで、世界との繋がりをさらに深め、敦賀が国際社会とともに発展することである。 したがって、各活動には、以下のような具体的目的を定めている。 ①留学生と敦賀市民が相互交流を通して友情を築き、その友好の輪を拡大すること。 ②敦賀高校生徒および留学生のコミュニケーション力や異文化間能力が向上し、海外に開かれた地域作りを牽引するグローバル人材へ成長すること。 ③異文化交流が文化的多様性を地域のさらなる成長や発展の源泉とするまちづくりに繋がること。 ④留学生が、鉄道と海運の町・敦賀市の発展の歴史や文化を理解し、敦賀および嶺南地区の魅力を世界に発信することで、嶺南と世界を重層的なネットワークで結ぶこと。	
(3) プロジェクトの実施内容	
本プロジェクトでは、相互理解、異文化交流、そして多文化共生をテーマに、1. 米国大学生のホームステイプログラム、2. 敦賀フィールドスタディ、3. 敦賀スタディツアー、そして、4. ホームビジットプログラムと、4つの活動を実施した。 1. 米国セント・マーチンズ大学(SMU)生のホームステイプログラム 福井大学国際地域学部は学術交流協定校である米国セント・マーチンズ大学の日本文化スタディツアーの後半4日間を福井市と敦賀市に招致した。敦賀市では、5月26日・27日の2日間に、SMU	

【様式2】

生5名と教員1名が、敦賀市内視察、敦賀高等学校生徒との交流、ホームステイ、および、学校文化体験を行なった。

1) スケジュール

期間：令和7年5月24日(土)～5月27日(火)

受入：SMU学生5名 引率教員1名

場所：福井市、福井大学、敦賀市、敦賀高等学校

予定：5月24日(土) 午後 福井駅到着 福井大学祭見学

5月25日(日) 終日 ホームステイプログラム(福井市)

5月26日(月) 午前 敦賀市内視察

5月26日(月) 午後 敦賀高等学校訪問、生徒との交流、クラブ活動参加

5月26日(月) 午後 ホームステイプログラム(敦賀市)

5月27日(火) 午前 敦賀高等学校教職員との交流 (正午 東京へ移動)

2) 活動内容(敦賀市、敦賀高等学校)

①5/26 10:30-14:30 敦賀市内視察

SMU学生5名と教員1名、敦賀高等学校生徒5名(ホストファミリー)と教員2名で、敦賀の郷土料理で昼食交流会を行なった。その後、敦賀ムゼウム、敦賀気比神宮、そして気比の松原を訪問し、鉄道と海運のまち・敦賀の発展と人道の歴史、および、敦賀の文化と自然を紹介した。

②5/26 14:00-17:30 敦賀高等学校訪問

敦賀高等学校教職員との交流会の後、高校の施設見学、そしてクラブ活動を見学、伝統文化を体験した。茶道部でのお茶会、剣道部では竹刀を握って練習、柔道部では投げ技を披露し、弓道部では的を狙うなど、高校生が企画した日本の伝統文化に触れ、共に汗を流した。また、日本の学校教育の特色である課外活動(文化系・体育系クラブ活動、社会貢献活動など)の意味や重要性について紹介した。

③5/26 17:30-5/27 08:00 ホームステイプログラム

SMU生5名はそれぞれ一人ずつ敦賀高等学校生徒の家族宅に、SMU教員は敦賀高等学校職員宅に滞在し交流を深めた。なお、5月8日(日本時間08:30、太平洋標準時16:30)に、SMU生と敦賀高等学校生は、オンライン交流会(50分)を実施していたため、5/26の交流会およびホームステイプログラムはスムーズに開始することが出来た。

④5/27 08:00-11:30 敦賀高等学校生徒との交流会

SMU生と教員はそれぞれホームステイ先の敦賀高等学校生徒と職員と一緒に登校し、生徒達が企画した日本文化紹介と異文化交流会に参加した。

2. 人道の港 敦賀フィールドスタディ

海運と鉄道のまち・敦賀の発展と人道の歴史を学ぶ「敦賀スタディツアー」を企画することを目的とし、課題探求プロジェクトII「多文化共生の実践と研究」を受講する福井大学国際地域学部2年生5名が2グループに分かれ敦賀市でフィールドスタディを実施した。

(グループ1) 令和7年10月24日(金) 国際地域学部2年生2名

敦賀駅から敦賀港まで徒歩で移動。ユダヤ難民が辿った道を歩きながら、ユダヤ難民の当時の状況を伝える看板などで歴史を迫体験した。また、敦賀ムゼウムではユダヤ難民上陸の歴史とともに、ポーランド孤児救済について学び、鉄道博物館や敦賀市立博物館では敦賀の発展や日本のグローバル化の拠点としての敦賀の歴史的役割について学びを深めた。

(グループ2) 日程：令和7年11月03日(月) 国際地域学部2年生3名

ユダヤ難民とポーランド孤児救済の常設展、および、新たに始まった企画展「テレジン収容所の若い画家たち展」を見学した。さらに、人道の港 敦賀ムゼウム リニューアルオープン5周年記念イベント『みる しる わかる ムゼウム Days!』に参加した。テレジンを語りつぐ会代表 野村路子氏

【様式2】

の講演「1万5000人のアンネフランク―絵を描くことは生きる力―」では、チェコのテレジン収容所で希望を持ち絵を描き続けた子どもたちについて学んだ。さらに、敦賀赤レンガ倉庫、敦賀鉄道博物館を視察、ユダヤ難民の足跡を辿って気比神宮を訪問した。

3. 敦賀スタディツアー

国際地域学部生と留学生の合計30名が、異文化交流を楽しみながら、地域の発展と人道の歴史について学ぶことを目的に敦賀市を訪問した。

1) 概要

日時：2025年11月15日（土）09:00-17:30

参加者：合計30名（9カ国・地域）

留学生20名（アルゼンチン、ウガンダ、カンボジア、台湾、中国、
バングラデシュ、フィリピン、ベトナム）

国際地域学部1年生5名、国際地域学部2年生5名

予定：09:00 福井大学文京キャンパス出発（京福バス貸切）

10:15 気比神宮見学

11:00 グループ昼食会

13:00 気比の松原散策

14:00 人道の港 敦賀ムゼウム見学

15:30 敦賀市立博物館見学

16:30 敦賀出発

17:30 福井大学文京キャンパス到着・解散

2) 活動内容

①10:15-13:50 異文化交流と敦賀の文化・歴史

グループごとに気比神宮を散策し敦賀市内で昼食をとった。その後、気比の松原にバス移動し自由行動とした。学生たちは敦賀の文化と自然に触れながら、相互交流を行なった。

②14:00-16:30 敦賀の発展と人道の歴史

敦賀ムゼウムでは、ポーランド孤児およびユダヤ難民の受入れと救済など敦賀の人道の歴史について学んだ。次に、敦賀鉄道資料館と敦賀市立博物館では、シベリア鉄道の開通とウラジオストク―敦賀定期航路の開設により敦賀港が国際港になったこと。さらに、新橋―金ヶ崎（敦賀）の鉄道開通によって、東京から欧州まで切符1枚で行けるようになったことが、敦賀を国際都市へと発展させたことなどを学んだ。学生たちはボランティアガイド3名（日語2名、英語1名）との会話や質疑応答から敦賀についての知識を深めることが出来た。

4. ホームビジットプログラム

敦賀高校生徒の家庭にホストファミリーとして福井大学の留学生を受け入れていただき、伝統行事や料理作り体験、敦賀市・嶺南地域の名所案内、そしてスポーツやレクリエーションなどの活動を通して、家族と留学生が1日交流し、相互理解を深め、友情を育てていただくプログラムである。

日時：令和7年12月20日（土）10:00-17:00

場所：敦賀市・嶺南地区（開会式 敦賀駅オルパーク、解散場所 敦賀駅）

参加者：敦賀高等学校ホストファミリー15家族

福井大学交換留学生7名、正規留学生3名（7カ国・地域：米国、インド、
台湾、中国、ベトナム、カンボジア、フィリピン）

予定：10:00 オリエンテーション（場所：敦賀駅交流施設 オルパーク）

予定・注意事項説明、ホストファミリーと留学生の紹介・集合写真

10:30 ホームビジットプログラム開始・自由行動

17:00 集合・解散（場所：敦賀駅）

オンライン交流会：

12月17日（水）と18日（木）に、敦賀高校生徒と留学生の間で事前のオンライン交流会（60分）を実施した。初対面となるので、自己紹介や当日の予定などについて話し合った。

(4) 得られた成果

本プロジェクトにおけるそれぞれの活動は、冒頭で述べた4つの具体的な目標を達成している。

1. 米国 SMU 生のホームステイプログラム

5月26日(月)・27日(火)に実施したホームステイプログラムの効果を確認するために、ホストファミリーを引き受けていただいた敦賀高校生5名にホームステイプログラムについてアンケート調査を行なった。回答期間は6月5日(木)～7月5日(土)とした。

①満足度（相互理解と友好関係の構築）

まず、効果として、目的①「留学生と敦賀市民が相互交流を通して友情を築き、その友好の輪が拡大」していることを確認出来た。

5名全員がホストファミリーの経験は『とても楽しかった』と最高評価をつけた。さらに、4名が『次回もやりたい』と回答、今回の満足度の高さが確認出来る。生徒の一人は『本当に今までの人生の中で一番いい経験をさせていただきました。本当にありがとうございました。また今後そのようなプログラムがあれば積極的に参加したいです』と述べ、プログラム終了後も留学生とDMで連絡を取り合い、交流を継続しており、近い将来、米国に行く目標ができた、と結んでいる。また、別の生徒は『普通の友達以上に仲良くなれた気がしてすごく楽しかったし、お別れするときに泣いてくれたのがとても嬉しかったです』と述べた。他の生徒たちも同様に交流を通して相互理解と友情が育まれたことが確認出来る。

②グローバル人材育成（コミュニケーション能力と異文化間能力）

次に目的②「敦賀高校生徒および留学生のコミュニケーション力や異文化間能力が向上し、海外に開かれた地域作りを牽引するグローバル人材へ成長すること」が出来た。

プログラム開始前にすべてのホストファミリーが『言葉が通じるか』、『会話が成り立つのか』、『ちゃんと伝わるのか』など、コミュニケーションに不安をかかえていた。しかし、プログラム終了後はすべてのファミリーが『言葉の壁』は、あまり感じなかったと回答している。さらに、『英語で会話するという行為への不安がなくなった』や、『アメリカの先生に英語が上手と言われたので、自分の英語力にも自信ができました』など、異文化コミュニケーションのハードルが下がり、英語コミュニケーションに対する自信が芽生えていることも確認出来る。

さらに、相互理解と互いの文化に対する敬意と共感、また、文化背景の異なる人々と交流することに対する期待やポジティブな態度を確認することが出来る。一人の生徒は『外国と敦賀の文化に沢山触れることができてとても楽しく良い経験になったと感じた。今後の勉強のモチベーションにして頑張る』と述べた。他には、『日本とアメリカの文化を共有したため、異文化理解が深まったと感じた』、『他の国の文化も多く知れたことは自分の将来にとってプラスになった』、そして、『外国人と関わることは楽しいと再確認できた』と述べている。

なお、敦賀高等学校によるSMU生の受入れはHP等で紹介された。

<https://www.tonkou.ed.jp/archives/14866>

2. 人道の港 敦賀フィールドスタディ

学生に2つの課題を出した。一つは、海運と鉄道のまち・敦賀の発展と人道の歴史を学ぶ「敦賀スタディツアー」を企画すること。二つ目の課題は、「敦賀にムゼウムという施設があることにより得られる貴重な機会をどのように市民に還元できるのか。敦賀ムゼウムの存在は、市民にどのような意味を持つのか」について考察しレポートにまとめること。

①敦賀スタディツアー：学生は下記予定表を作成し、出発1週間前に参加者に配布した。本ツアーは、異文化交流、敦賀の文化と自然、敦賀の発展と人道の歴史を学ぶことを目的としている。

SCHEDULE
スケジュール

9:00 福井大学集合
GATHERING AT UF

10:00 気比神宮
KEHI JINGU SHRINE

11:00 お昼ごはん
LUNCH

12:10に気比神宮に集合してください！

12:30 気比の松原
KEHI PINE PARK

13:30 敦賀ムゼウム
TSURUGA MUSEUM

14:30 鉄道博物館
RAILWAY MUSEUM

15:00 敦賀市立博物館
TSURUGA MUNICIPAL MUSEUM

16:00 敦賀出発
DEPARTING TSURUGA

17:00 福井大学到着
ARRIVING AT UF

緊急連絡先/Emergency contact
小幡先生：090-7556-8788

鉄道博物館/Railway Museum
敦賀に日本海側で初めて鉄道ができました。そのあと、外国とつながる国際列車も走りまし
た。敦賀鉄道資料館では、鉄道の歴史や列車の
模型を見ることができます。

In Tsuruga, the first railway on the Sea of Japan side was built in Tsuruga. After that, international railway connecting to foreign countries also was built. The railway museum exhibit a history about the railway of Tsuruga and the railway model.

気比の松原 /Kehi pine park
日本三大松原の一つである、気比の松原。長さ約1km、松の木が約1万7千本もあります。散歩コースにもおすすめです。

This park is one of the best three pine park in Japan. Its length is about one kilometer, and there are about 17,000 pine trees. Here is the best place to walk!

敦賀市立博物館 /Tsuruga municipal museum
ここでは、江戸時代におこなわれた北前船や国際的な港としての敦賀の歴史の資料があります。
The museum exhibits a lot of materials which tell us Tsuruga's histories for example During the Edo period, the trade conducted by the Kitamaebune ships and the development of the port as an international trading hub.

Memo

Questionnaire !



②敦賀市民にとっての敦賀ムゼウムの意義

学生たちは敦賀ムゼウムの意義を以下の3点にまとめた。

- ・市民が町の人道的な歴史を日常的に学ぶ機会を得られる。それによって、市民の行動が難民や孤児の救済を可能にしたことを理解することが出来る。「自分ごと」として捉え、どう行動するか、あるいは、どう生きるかを考える機会を与える。
- ・ムゼウムでの学びが、倫理観や判断力を育て地域の意識向上につながる。単なる歴史保存施設ではなく、市民の意識や社会のあり方に影響を与える学びの場である。市民が社会を変えていく、あるいは、作っていくんだという市民の意識醸成の役割を果たす。
- ・文化背景の異なる人々と共に生きるための価値観を育てる。過去の市民の行動を未来の市民へと受け継ぐ仲介をしている 敦賀の歴史を地域の誇りとして再認識し、未来に生かすための拠点となる。

学生たちは、文献・資料調査、およびフィールドスタディを通じて敦賀について学びを深め、敦賀スタディツアーにおいて留学生の学びをサポートした。

3. 敦賀スタディツアー

参加学生にアンケート調査を行なった結果、敦賀スタディツアーの満足度は4.85点（5点満点）と非常に高い数値を示した。また、目的達成度では、異文化間交流が90%、敦賀の文化・歴史についての学びが100%であった。したがって、本プロジェクトの目的①と②を達成することが出来たと考える。

参加学生からは、敦賀が日本のグローバリゼーションに重要な役割を果たしてきたことに感銘を受けた、敦賀の神道文化に興味を持った、敦賀は自然、歴史史跡、そして文化施設など、訪問するところが多く魅力的で美しい町であった、などのコメントがあった。

本ツアーを通して、参加学生の多くが、敦賀の文化や歴史について SNS で情報発信しており、本プロジェクトの目的④「留学生が、鉄道と海運の町・敦賀市の発展の歴史や文化を理解し、敦賀および嶺南地区の魅力を世界に発信すること」が、（SMU ホームステイプログラムの参加学生の情報発信と合わせて）、達成されることになった。今回は少なくとも10カ国・地域に及ぶ。

また、過去に実施した敦賀スタディツアーの参加学生がそうであったように、今回の参加学生も、今後、新たな交流人口や関係人口として、嶺南と世界を重層的なネットワークで結び（目的④）、敦賀市・嶺南地区の活性化に貢献することが期待される。

4. ホームビジットプログラム

プログラム参加学生にアンケート調査を実施した結果、本事業の目的(①～④)が達成できたこと、

【様式2】

つまり、期待された効果が認められることが、確認出来た。

目的①「留学生と敦賀市民が相互交流を通して友情を築き、その輪を拡大すること」

留学生および敦賀高校生のすべてが相互交流を通して友情を築くことが出来たことを確認できた。このことは、プログラム全体に対する満足度の高さにも裏付けられている。留学生 10 名の内 9 名が『大変満足』、1 名が『満足』と回答している。同様に、敦賀高校生の満足度も高い。敦賀高校生 15 名全員が『とても楽しかった』と回答、さらに、12 名が『次回もホストファミリーをしたい』、3 名が『すこし時間をおいてやりたい』、と回答している。また、『仲を深めることができた』、『とても個人的なことまで話すことができた』、や『日本で妹が出来た』などのコメントが次々と寄せられ、プログラムを通して留学生とホストファミリーが明らかに友情を育んでいることがわかる。敦賀駅では、別れが名残惜しすぎて電車を 1 本遅らせて福井に帰るというエピソードが今回も生まれた。

目的②「敦賀高校生徒および留学生のコミュニケーション力や異文化間能力が向上し、海外に開かれた地域作りを牽引するグローバル人材へ成長すること」

敦賀高校生も留学生もプログラムが開始前に最も心配していたことはコミュニケーションであった。そもそも言葉が通じるのか？会話が出来るのか？自分のことが分かってもらえるのか？相手のことがわかるのか？ など。今回、コミュニケーション言語は、2 組が「英語のみ」、3 組が「ほとんど英語、すこし英語」、8 組が「英語と日本語」、1 組が「ほとんど日本語、少し英語」、最後の 1 組が「日本語・英語、と外国語」であった。しかし、難しい場面がありながらも、高校生も留学生も言語・非言語コミュニケーションを駆使し、思っていることを粘り強く伝えることで、ほぼ全員が結果的に「コミュニケーションはうまくいった」「コミュニケーションはとても楽しかった」と回答している。

これは、彼らが異文化に対して先入観や偏見を持たず、敬意、オープンな心、さらに好奇心や探求心をもって異文化を理解しようと努力した結果である。異文化に対するこのような態度を持ち続けることで、学生達は異文化に対する広い知識と深い理解そして鋭い分析力を有し、やがて異文化間能力(異文化コンテクストにおいて適切かつ効果的に対応できる能力)を獲得するものとする。学生達は異文化接触を通して異文化間能力を鍛えているのである。

目的③「異文化交流が文化的多様性を地域のさらなる成長や発展の源泉とするまちづくりに繋がること」

敦賀高校生のアンケートからは、異文化交流を経て、外国人と話すことの苦手意識が減りハードルが低くなったこと、留学生の母国が好きになった、相手の文化をもっと知りたい、外国人や異文化にもっと積極的に関わりたい、など、外国人との対話や外国文化に対する関心や好奇心にポジティブな変化があったという声が聞かれる。

さらに、アンケートから、文化的多様性に対する学生達の意識が、自分が住む地域の外国人住民との交流に向かっていることが確認出来る。このような学生達こそが、外国人にとって開かれたまちづくりを推進できる人材である。また、かれらの存在は、敦賀への外国人からなる交流人口および関係人口を拡大し、敦賀および嶺南地区の活性化に貢献すると考える。

目的④「留学生が敦賀の発展と人道の歴史や文化を学び、その魅力を世界に発信すること。」

留学生へのアンケートを通して、留学生はホストファミリーと一緒に、資料館、博物館、観光名所、や商業施設を訪問し、敦賀の文化や伝統、自然や観光地、そして敦賀の発展と人道の歴史について深く学べたことが確認出来ている。留学生には、ホームビジットプログラムの参加条件として、敦賀の魅力を SNS で母国の家族や友人に伝えることとしていたため、少なくとも 7 カ国・地域に敦賀についての情報が拡散されている。また、プログラム参加者の多くが日本人や留学生の友人を伴って敦賀を再び訪れている。また参加者の中には、ホームビジットの経験や敦賀での学びをレポートにまとめ原籍教育機関に提出している。このような世界との繋がりが、今後の敦賀の発展に寄与すると考える。

【様式2】

(5) 今後の展開 ※今後、共同研究等への発展が見込める場合は、展望について詳細に記載ください。

異文化交流イベントの継続的实施は多文化共生の実現に貢献する。実証研究を通して、その成果を広く市民に周知することが望ましい。

また、筆者は2026年4月にリトアニアのカウナス市を訪問する。目的の一つは、リトアニアと敦賀の若者の交流の可能性を模索することであり、現地ではヴィタウタス・マグナス大学教育学部教員、学校関係者、そして杉原ハウス関係者との協議を予定している。敦賀のグローバル人材育成へに貢献できることを期待する

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	小浜市営住宅活用提案プロジェクト		
代表者名	菊地 吉信	代表者所属・役職	工学系部門・准教授
配分額（円）	450,000 円		

(1) 期間
令和7年5月～令和8年3月
(2) プロジェクトの目的
全国の公営住宅には高経年の住棟が多く、入居者の高齢化が進むとともに空室が発生しており、空室の有効利用と地域コミュニティの活性化が課題となっている。また小浜市では、既成市街地内に生活サービス機能がコンパクトに集積しているにもかかわらず市街地人口が減少している。そこで本プロジェクトは以下3点を目的とする。 1. 小浜市営住宅の空室活用プランの提案を行う 2. 市営住宅団地コミュニティの持続に必要な取組の提案を行う 3. 地域生活拠点としての市営住宅団地整備方針の提案を行う
(3) プロジェクトの実施内容
協働先である小浜市営繕管財課と協議しつつ、市営後瀬団地（小浜市後瀬町2-3）を主な対象として以下の事柄を実施した。 ・団地内空き住戸の実測調査および活用プラン作成 ・住民アンケート ・関連組織ヒアリング ・他地域の公営住宅活用事例調査 ・協働先との定期的な打合せ（全3回）

(4) 得られた成果

取り組んだ内容を成果報告書にまとめ、小浜市に提出した。結論の概要は以下のようである。

- ・後瀬団地内には住民間交流に対する一定の意欲が存在する。とくに高齢化が進む団地において徒歩圏内で気軽に参加できる交流拠点への潜在的需要は小さくない。
- ・先行事例調査より、空き住戸や集会所を活用した取組が実際に展開されていることが確認できた。その一方で、担い手不足や利用者数が想定を下回るといった課題もある。そのため、活用前の丁寧な需要予測、利用開始後のアンケートやヒアリングによる効果検証、検証結果を踏まえた継続的な改善、が重要となる。
- ・上層階空き住戸の活用については、利用者像を明確化した戦略的活用が有効と考えられ、大学学生寮の不足や企業の社宅的利用など、一定期間の居住ニーズに対し、空き住戸を柔軟に提供できる仕組みを構築することが望ましい。
- ・集会所については、現状では鍵の管理や運営の担い手不足により十分に活用されていないが、民生委員や自治会、関係機関などと連携し、運営主体を明確にすることができれば、団地内の賑わい創出や見守り機能の強化につながる可能性が高い。
- ・団地の持続的な活力を維持するためには、若年層の受け入れによる世代バランスの改善、高齢者の交流拠点の確保、見守り体制の強化、といった複合的な視点からの活用が求められる。

(5) 今後の展開 ※今後、共同研究等への発展が見込める場合は、展望について詳細に記載ください。

他地域との比較研究に発展させたい。

【様式 2】

令和 7 年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	福井梅の収量向上のための動画像・点群処理・骨格化を用いた樹構造解析と収量調査		
代表者名	築地原 里樹	代表者所属・役職	講師
配分額（円）	450,000		

(1) 期間
2025 年 5 月 2 日から 2026 年 2 月 28 日
(2) プロジェクトの目的
農林水産省の統計によると福井県の梅の単位面積あたりの収量が他県に比べ相対的に少ない傾向があり，その原因特定と就農人口減に備えた農業従事者間の技術伝承が必要となる．技術伝承の元になる従事者本人の知見は定量化されることは少なく，さらに知見を基にした剪定が起こす効果に対する定量的データも乏しく，暗黙知として技術が受け継がれている．本研究では高画像解像度・高時間解像度のカメラを用いてウメの樹を計測し，幹や枝の構造情報を付与した収量を分析することで，園芸の暗黙知を併せた樹構造評価を目的とする．
(3) プロジェクトの実施内容

具体的には、以下の 2 つに取り組んだ。A) アクションカメラやドローンで撮影した動画を用いウメの樹の三次元点群を生成し、点群に対して骨格化することで幹や枝の構造情報をグラフとして抽出した。抽出したグラフ、各節点の三次元位置や節点間の幹・枝に当たる点群

(図 1) を組み合わせ、ウメの樹の三次元形状を計算した。また、B) ウメの収穫作業時に樹ごとの総重量を、樹の中の主枝・亜主枝のセットごとに計測することで、研究者や農業従事者が暗黙知として持つ元気度合いを数量化した。

福井県農業試験場の若狭・美浜地区の園芸研究センターの圃場内において生育するウメの樹を対象に動画画像計測を実施し、収穫作業を手伝う中で 3 本の主枝ごとの重量を分けて計測した。研究実施や収穫作業には本研究室所属の学部 4 年生 1 人と修士 1 年生 2 人と共同で進め、工学を用いた農業・園芸の課題解決を体験させた。

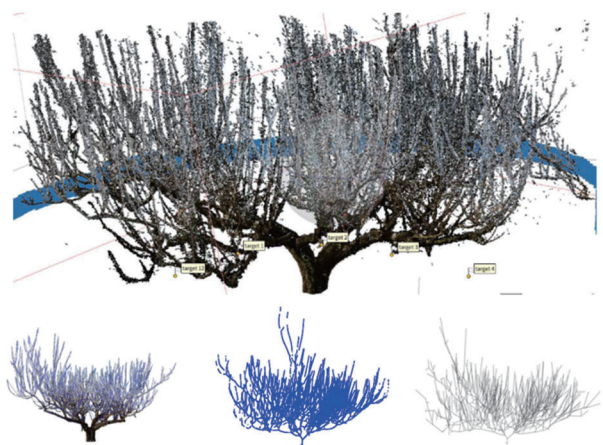


図 1：ウメの樹の三次元点群と骨格化の例

(4) 得られた成果

骨格化アルゴリズムを適用しウメの樹の三次元点群に適用し、図 2 の木グラフを得た。ウメの樹の幹を検出し、幹のエッジに接続される枝を主枝と判定し、その先に接続される枝を主枝に属する枝と判定した。各主枝に属する枝の点群から経路数、本数、平均半径と長さを計算し、各主枝のパラメータとした。6 月 18 日に園芸研究センターで収穫実験を行い、調査樹の各主枝の収穫量を計測した。各主枝のパラメータと収穫量の相関を計算し、本数や経路数は 0.9 以上を満たすことを確認できた。収穫量予測に十分利用可能であることが確認できた。

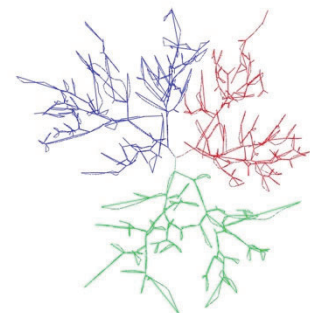


図 2：主枝分けした木グラフ

(5) 今後の展開 ※今後、共同研究等への発展が見込める場合は、展望について詳細に記載ください。

三次元解析により樹の計測を自動化することで、従来の手動計測を AI に代替できる。福井県嶺南若狭町におけるウメの収穫量推定や若年層の指導に用いることのできるソフトウェア開発が見込める。

また、農業・園芸に対する工学・情報技術の適用に関する外部資金は、農研機構などの研究機関から競争的資金として公募が増えている状況で、本研究も農業ロボティクスとして応募可能である。本予算を使い農工連携の実績を積み、申請書の信憑性を高めることで、外部資金獲得の可能性を少しでも高める。

【様式 2】

令和 7 年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	嶺南地域における未活用食資源のリデザイン		
代表者名	石原周太郎	代表者所属・役職	地域創生推進本部附属創生人材センター・特命助教
配分額（円）	450,000 円		

（１）期間
令和 7 年 4 月 28 日 - 令和 8 年 2 月 28 日
（２）プロジェクトの目的
嶺南地域は「御食国」と呼ばれる長い歴史に裏付けられた豊かな食資源と文化がある。一方で、豊かな食資源を支える 1 次産業従事者の高齢化や担い手不足などにより持続可能性が危ぶまれている。また、環境問題や気候変動による作物の不作・不漁、獣害被害なども深刻化しており、これまで以上に資源の有効活用の必要性が問われている。そこで、これまで活用されていなかった食に関する資源に対して、リデザイン（再構築）を行うことで既存の課題を解決するとともに、嶺南地域における食文化に係る新たな価値を創造することで、地域の持続可能性に貢献することを目的とする。
（３）プロジェクトの実施内容
これまで活用されていなかった食に関する資源をリデザインする対象として、敦賀市の工務店・大幸ハウジングがオーナーである中心市街地の空きビルを選定した。現在、害獣駆除された 9 割が焼却処分されている現状を変えようと、ジビエにして流通を目指す起業家とともに、地元のおばあちゃんがジビエや伝統野菜を用いたお惣菜を製造・販売する店舗にリノベーションした。建築・都市環境工学科の学生 4 名とともに地域資源の魅力や未活用資源の新しい価値を発見し、それを活かした店舗の内装デ

デザインの提案、未活用資材を用いた内装工事の施工、お惣菜新商品の開発を行なった。その結果として、11/29 に kehi foods を開店させた。

具体的には、以下の通り活動を進めた。

① 食に関する未活用資源に対する取り組み

- ・未活用資源であるジビエを販売する店舗としてどのようなデザインを行うべきか、学生が内装デザインの提案を行った。その結果として、未活用建材の有効活用を図るべきとの方向性が採用され、オーナーの資材倉庫を見学し、どのような半端材やデッドストック品があるのか調査した。
- ・デッドストック品のタイルや半端材をランダムに組み合わせることによって学生による新しいデザインを内装に取り入れた。
- ・未活用の廃棄食材（卵の殻）を釉薬にアップサイクルし、オリジナルタイルを製作した。
- ・ジビエや伝統食材を用いたお惣菜の新商品開発に取り組んだ。

② 地域の持続可能性に貢献する取り組み

- ・学生が地域に入り活動を行うことで、まちづくり活動の担い手となった。
- ・内装設計に留まらず、街の居場所としての店舗デザインの提案を行った。
- ・職人やお惣菜を作るおばあちゃんとの打ち合わせを通じ、学生が地域や現場の声を聞くことのできる機会を設けた。
- ・大学では学べない実際の建築施工を、職人の監督指導のもと 8/28・29 に合宿形式で行った。
- ・結果として本活動が終了したのちも、敦賀のまちづくりに関われる人脈と関わり合いを作ることができた。

（４）得られた成果

中心市街地の空きビルをリノベーションし、ジビエや伝統野菜を用いたお惣菜屋さんとして開店させることができた。内装にはデザインだけではなく、施工も学生と一緒に携ることができ、大学内では学ぶことができない施工経験を提供することができた。さらに、未活用食資源を建材としてアップサイクルする取り組みを行うことで、本来であれば捨てられるだけのゴミに対して新しい価値を創造することができた。

（参考）Instagram <https://www.instagram.com/kehifoods20251129/>

（５）今後の展開 ※今後、共同研究等への発展が見込める場合は、展望について詳細に記載ください。

kehi foods との関係は今後も継続していく予定である。ビルのオーナーである大幸ハウジングからは、他にも中心市街地で空きビル活用の意向があることを伺っており、次年度以降も学生とともにリノベーションを軸とした活動を展開する予定である。